

## <辛口時評>

### 詩人と政治家

年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず

これは初唐の詩人劉希夷の「白頭を悲しむ翁に代わる」という詩の一節である。白髪のお翁に代わって移ろいやすい人生の悲哀を詠った名句として、1300年以上を経た今もなお広く人口に膾炙(かいしゃ)している。しかし、劉希夷はこの詩句のために命を落としている。諸説あるが、この詩句を譲ってほしいと義父に迫られたが断ったため命を奪われたという説が有力である。

劉は身を削って紡いだこの詩句を命をかけて守ったことになる。私は常々詩人とは言葉に命をかける人のことだと思っている。

昭和初期のプロレタリア詩人小熊秀雄は(若いころ読んだもので手元に原文もなく正確な引用ではないが)、詩人は「内なる声に命じられ、一つしかない言葉を探し求めて夜を徹して苦しみ抜く」と言っている。確かに持人は感性のエリートであり、それ故にかすかな風のそよぎ、木の間を洩(も)れる陽のきらめき、岩かげに揺れる野花、小さな虫の声にも全宇宙を感じ、インスピレーションに心が慄く。それを表現する言葉を求めて身悶(もだ)えして苦しむ。

森羅万象に凡人より遥(はる)かに多くのことを見、聴き、感じ、それ故に人知れず傷つき、苦悩し、呻吟(しんぎん)し、歓喜する。人生の意味、時間の流れを凡人の何倍も深く、重く生きるべく運命づけられた人だけが、詩人となる特権を持つのだといえる。

かつて中野重治は、霧の濃い北海で手網を投げて漁をする黒い人影を見て「北見の海岸」という詩を書いた。それに次の一節がある。/獲物はいつも乏しかろう/部落は定めし寒かろう/そして妻子の間にも話の種が少なかりやう/そして彼の獲物は売れようか/彼の手にも銭が残ろうか/彼の息子や娘はどこにいるだろう/彼らは病気をせぬだろうか/そして医者はいらぬだろうか/彼らは死なぬだろうか。

凡人にはただの漁村風景なのに、彼の想いは貧しくも懸命に生きる漁師と家族と漁村の運命にまで広がり深まっていく。

政治家の最大の武器も言葉である。言葉の後ろには彼の思想があり、思想の後ろには彼の感性がある。彼の言葉が人の心を打つためには、彼の思想が深く、何より感性が豊かでなければならない。

豊かな感性がなければ現実と切り結ぶ思想も、人の心を打つ言葉も生まれぬ。つまり彼は感性のエリートでなければならない。ということは、政治家と詩人は言葉に生命(政治生命や文学生命)をかけること、感性のエリートでなければならないことの2点で、共通点を持っていることになる。

昨年4月、総理就任以来8割を超す驚異的支持率を持ってきた小泉さんの最大の武器も言葉だった。ワンフレーズ・ポリティックスといわれるように、簡潔で分かりやすい言葉で巧みに世論を誘導してきた。いわく「自民党をぶっ壊す」「聖域なき構造改革」「構造改革なくして景気回復なし」「備えあれば憂いなし」「三方一両損」「米百俵」|。こうしたキャッチフレーズや例え話で政治の大問題が「わかりやすく」説明され、国民をその気にしてきた。

小泉総理の生みの親、田中前外相も分かりやすさでは人後に落ちない。かつて党の総裁候補を「凡人、変人、軍人」と鮮やかに特徴づけたが、外相時代の「外務省は伏魔殿」も痛烈な傑作だった。その田中さんを切り捨ててから2つの個性の相乗効果が消え、小泉発言は精彩がうせ、支持率も4割を切った。

ところで、二人のワンフレーズ・ポリティックスの天才たちによって、政治にどんな変化が起こったか。立花隆氏は政治のTV化が極限まで進み、TV映りが競われて政治も世論も情動化したこと、とくに田中前外相による政治のワイドショー化で「どうでもいい問題が大問題として重大視され、大問題がどうでもいいような扱いを受けるといふ、政治的価値の倒錯現象を起こしてしまった」と警告している(文芸春秋6月号)。

政治家の言葉の価値は分かりやすさではなく、時代的課題への洞察がどれだけあるかによる。詩人が風のそよぎに人生の意味を感じ取るように、政治家は街角の小さな光景に時代の風、未来からの声を感じ取れなければならない。エリートとは時代のミッション(任務)を先んじて感じ取り、進んでそれを担う人のことだ。

有事立法や個人情報保護(メディア規制)法が果たして時代のミッションなのか、国民的論議がまだ不足している。ワールドカップで浮かれてばかりいられない。